



# 福祉教育推進における視点について



## 福祉教育の目的は・・・

“一人ひとりを互いに尊重する”とは、どのようなことなのかを考え、気づき、そして実践する力を養い、思いやりのところを育てます。 ※ 福祉教育 ≠ 技術の習得

## 実践する上での課題って・・・

- ・子どもたちに「何を」「どうやって」伝えていくか。
- ・どのようにして自分たちに出来ることを“考え”、“気づき”、“実践”できるようにしていくか。

## さまざまな理解・体験(例)

|                    |                        |
|--------------------|------------------------|
| 障がいについての理解         | 障がいの種類・原因・社会的不利等       |
| 様々な援助・コミュニケーションの理解 | 高齢・障がい等の特性における対応方法     |
| 擬似体験               | 実際の生活状況を想定した体験         |
| 用具を使用する体験          | 点字器を使って校内に点字案内を作る等     |
| 援助をする体験            | 車いすの介助等(やさしい介助) ※介助≠操作 |
| 参加する体験             | 自分たちの住む街の調査・マップ作り等     |
| 交流体験               | 実際に障がいのある方や施設等での交流     |



地域・学校によって課題は異なり、それぞれが直面している福祉課題への取り組みが大切です。  
⇒“心のバリアフリー”…福祉学習の導入の際に、車いす・高齢者擬似体験等の福祉体験を取り入れることがあります。

## しかし・・・

体験のみで完結してしまう学習や、人的・時間的に無理のある進め方によっては、事故がおきたり、「高齢(障がい)者でなくて良かった」等、加齢や障がいに対する[マイナスイメージ](#)を増幅するだけの結果に陥る可能性も・・・。

※本来、誰でも歳を重ねることで身体機能が低下していきます。しかし、それは段階をおって変化していく為、多くの方はその状況に応じた“動き”をひとそれぞれ自然に習得し実践しています。また、この変化に対して、「大変だ」と感じる人もいれば、そうではない人もいます。

“=全ての高齢者”ではなく、“**個人差がある**”ことを知ることが大変重要です。

## 気づきの多い授業にするために

### ◎ 「生活の中からの学び」を大切にす

福祉を題材とした学習は、教科書学習・擬似体験だけでなく、地域の高齢者や障がい者の方からお話を聞いたり、実際の現場体験等を取り入れるとより理解が深まります。

※体験はあくまでも“気づき”を得るための導入の一つです。体験後の学習に繋げるきっかけ作りとして福祉体験をご検討ください。

### ◎ 対象の捉え方

「援助の対象＝高齢者・障がい者」ではなく、地域で共に生活する一個人として捉える必要があります。

福祉は特定の人のものではなく、加齢や障がい・疾病等は誰にでも関係するものです。

→ 「あなたたち」ではなく「わたしたち」の学習であることを強調しましょう。

### ◎ “違い”を感じる

擬似体験を実施する場合、可能であれば特別な状況を作り出すのではなく、普段使用している校舎や通学路を利用することで、普段との「違い」を体感し易くなる。

※授業時間の関係や人数が多い場合等、無理のない会場設定を！

### ◎ 実施する「目的」・「ねらい」を明確に！

子どもたちに実施の趣旨を事前に理解できるようにしましょう。また、各種体験を実施する前に、まず教師自らが体験し、学習をすすめるておくとその後の方向性がはっきり。

### ◎ 地域とのかかわり

豊かな人間関係とふれあいの機会づくりを大切にしましょう。

### ◎ 「ふりかえり」を大切に！

感想文だけで終わるのではなく、個々の感想の違いから広がる学習こそが重要です。